

報告者:

森崎めぐみ(俳優、一般社団法人日本芸能従事者協会代表理事)、

匿名、

浅田智穂(インティマシーコーディネーター、株式会社 Blanket 代表取締役)

はじめに

この1年は、旧ジャニーズ事務所の代表による性加害が英国 BBC 放送のドキュメンタリーで顕在化したことを受けて、少なからぬ被害者が声をあげた結果、芸術・芸能分野で起きていることを国連人権委員会が来日して調査をしました。その後、伝統ある宝塚歌劇団の劇団員がハラスメントや過重労働が原因と見られる自殺や、テレビドラマの原作者が放送終了直後に自殺するなど、この業界に問題が山積していることが誰の目にも明らかになりました。そこで今回は、特に深刻な問題である過重労働とハラスメントに焦点を絞り、解決の方向性の現在地について、当事者と関係者で議論を深めて参りたいと思います。

1、概要と実態(森崎)

芸能従事者とは、俳優、音楽、演芸、舞踊等の表現の仕事をする芸能実演家とスタッフの総称です。個人事業者が94.6%を占めているため、労務管理者がいなく、健康管理は自己責任とされています。テレビ番組の放映や演劇・イベント公演等の開催日時や場所の指揮命令は厳格で、経済的従属性も高く、労働者性が50%以上あるものが半数いるとされています。その結果、平均睡眠時間6時間以下が59.3%で、寝不足が原因の事故や怪我が50.8%起きています。危険な作業が多く、業務に従事している際に事故等を経験した人が約7割、通勤中に事故に遭った経験のある人は約6割もいます。

業界全体が7次まで数えられる重層下請構造になっており、安全衛生管理者が不明です。専門性が高い技能は徒弟関係で伝承され、受注時に制作総額が不明とされるため、労務費の割合が定められず、報酬が曖昧で経費の交渉ができていないことがほとんどです。さらに安全衛生の状況が著しく悪く、トイレがない61.6%、膀胱炎の経験21.3%、更衣室がない85.2%で、日常的な生理的ストレスが大きい状況です。加えてハラスメントが多く、パワハラ93.2%、セクハラは73.5%起きています。

このような状況の結果、仕事上の安全に不安がある89.9%、重度の不安・うつ障害の疑いが11.7%もあり、自殺願望を42.7%の人が訴えています。この7年間に自殺報道のあった著名な芸能従事者は19名に上り、10代から30代が6割を占めており、非常に深刻な状況と考えられます。

2、当事者の経験(匿名)

夢だった映画配給会社に入社し、大好きなテレビドラマの制作現場に配属されましたが、朝5時にロケバスに乗って翌2時に退勤する生活を余儀なくされました。職人の世界だから、先輩は「背

中を見て学べ」といつて教えてくれません。撮影現場ではいつボディタッチされるかわからないから気が抜けませんでした。鳴り止まない怒鳴り声や、突然来なくなるスタッフがいました。私はある朝起きられなくなり、適応障害を発症しました。

2017 年にハリウッドで「#MeToo」運動が勢いを増し、日本においても芸能関係の性加害問題、宝塚のパワハラ問題、問題表現での炎上などを耳にする機会が増えました。エンタメ業界における働き方改革・ハラスメント対策の重要性は一層増えています。それと同時に、「そんなことを言っでは作品は作れない」などを理由に、業界の改善は遅れをとっている状況です。

なぜ告発があつて立たないのでしょうか？なぜ俳優のメンタル理由の休業が多いのでしょうか？なぜテレビドラマの女性って主体性がない表現が多いのでしょうか？なぜ地上波のドラマはつまらないのに、Netflix のドラマはスケールが大きくて面白いと感じるのでしょうか？

元業界従事者の私から、業界全体に蔓延する「やりがい搾取」の理由と背景、特に「実際に働いていた頃はどうか考えていたのか」「なぜ辞められなかったのか」というソフト面にも焦点を当て、今後の改善に向けて話題提供をしたいと思います。

3、課題解決としてのインティマシーコーディネーター(浅田)

インティマシーコーディネーターとは、映画や演劇の制作現場で、ヌードや擬似性行為などの密着行為のあるシーンにおいて、俳優の身体的、精神的な安心安全を守り、監督の演出意図の実現を最大限サポートするスタッフです。また、監督やプロデューサーと俳優の間に潜在的に存在する力関係を断つ役割や、LGBTQ+ のアライという役割もあります。

舞台や映画、エンターテインメント業界で通訳をしていた私は、アメリカの団体、Intimacy Professionals Association の養成講座を受けて、日本で初めてこの資格を取得しました。このような経緯でインティマシーコーディネーターが日本に導入されて、4 年が経ちました。

それまでの日本の映画業界で俳優にかかっていた負担は甚大だったにもかかわらず、「芸術だから」「映画だから」と言われて慣例になってしまっていました。決して許されてはならないことです。

こういった状況の原因には、指揮命令体系によるパワーバランス、配役や演出に絶対的な権力を持つことに自覚がない監督やプロデューサーにあると考えられます。従来は、監督らと俳優にはゆるぎない信頼関係があるから由とされて来ましたが、それ自体に根拠はなく、非常に危ういことです。

そういった環境下にインティマシーコーディネーターが入ったことにより、第三者の目で適性に判断され、俳優の意見が尊重されるようになりました。

例えば、ヌードや性的なシーンにおける同意を得るようになったことにより、俳優が納得のいかなない演技をさせられたり、不本意な衣装の着衣を強要されることがなくなりました。こういったことから俳優が自分の演技に選択肢を持ち、自身の意見が尊重されるようになったことは非常に意義深いことです。

二つ目は、俳優が指揮命令を受ける監督やプロデューサーの圧に負けて、我慢をしなくて良くなったことです。さらに自分で選択したことであれば、不安を持たず、責任を持って役務を努められます。

俳優やタレントの自殺は少なからず起きています。原因は不明とされているものの、不安やうつ障害の割合が著しく高いことから、メンタルヘルスが健全な状況ではないことは明らかです。従前の

環境下における働き方が改善され、選択肢と同意にさらに重点をおくことができれば、過労自殺や過労死の防止につながると考えられます。権力勾配のない風通しの良い職場が最善ではありますが、現場から改善をするためには第三者の介入が必要と考えられます。

その他の課題解決のために考えられることは、いつでも相談できるホットラインのアクセスが容易であることや、産業医の設置、そして自分の意見を言える、自分を認めてもらえるという認識ができる環境への改善が非常に重要で必要と考えられます。

[2024-07-12 版]